

鉄幹に石川啄木と並び称された歌人・香川不抱

REV. 1 2025 年 8 月 5 日

我部山民樹（かべやまたみき）

1. はじめに

香川不抱



石川啄木（＊1）は初の歌集『一握の砂』に生活に即した新しい歌風を取り入れ、歌人として名声を得た。その革新的な歌風は、近代短歌の発展に大きく寄与し、後世の歌人たちに多大な影響を与えた。啄木と同時期に文芸結社・東京新詩社の与謝野鉄幹（＊2）に師事していた歌人・香川不抱は、生活派歌人として活動し、その歌の風狂調の歌風を鉄幹に評価され、鉄幹の推挙を受けて文芸雑誌「明星」（＊3）に作品が掲載された。また啄木に先立って生活派歌人としての新体制を拓いたことを鉄幹に激賞されたが、当時不抱が世に知れ渡ることは無かった。

しかし当時鉄幹や同人の不抱に対する評価は高かったし、近年において不抱の生誕地に「顕彰碑」が建立され、母校・丸亀高校（元丸亀中学校）の校庭に「香川不抱碑」が建立されるなど不抱を偲ぶ人たちがいる。

香川不抱、本名栄は、香川県綾歌郡川西村（現丸亀市川西にて生を受け、やがて1903年に香川県立丸亀中学校（現丸亀高等学校）に入学し、三年生のころから作歌に励み、真島琴山らと新詩社香川支部をつくる。1908年（明治四十一年）、丸亀中学を卒業後に上京し、新詩社同人となり与謝野鉄幹の内弟子として、与謝野鉄幹・晶子（＊4）夫妻に指導を受けた。鉄幹が創刊した文芸雑誌『明星』『スバル』（＊5）に作品を発表し、明治近代短歌史に足跡を残した。その後体調を崩し、1年余りで（在学中の1909年に転居した）高松に帰省。1917年、（大正6年）29歳の若さで病没した。

＊1. 石川啄木

○人物評

啄木はいわゆる明治人のイメージとはほど遠い、子どもっぽく、頼りない人物であった。からだも小さく、生活力もあまりない。金銭感覚も怪しい。故郷の岩手県渋民村を追われるように出てきた。啄木のもつ「傷つきやすさ」は読者の共感を呼び起こす。

○短歌に対する評価

啄木の革新的な歌風は、近代短歌の発展に大きく寄与し、後世の歌人たちに多大な影響を与えた。石川啄木は、短歌だけでなく、詩人としても非凡な才能を発揮した。彼の詩集『あこがれ』は、浪漫主義的な詩風と繊細な感性で注目を集めた。啄木は西洋文学の影響を受けつつも、日本語の美しさや響きを巧みに取り入れ、独自の詩的世界を築き上げたとされる。

○略歴

岩手県出身の歌人、詩人。「啄木」は雅号で、本名は石川（いしかわ はじめ）

1902 年ごろの啄木は『明星』に掲載された与謝野晶子（＊3）の短歌に傾倒し、自作の短歌も晶子を模倣した作風であった。その年の 11 月 9 日、新詩社の集まりに参加、10 日には与謝野鉄幹・晶子夫妻を訪ねる（晶子は 9 日前に長男を出産したばかりだった）

1909 年、妻・節子の函館時代から続く体の不調に啄木は適切な処置を執らず、母・カツと節子の関係も改善されないままだった。節子は書き置きを残し、長女・京子連れで盛岡の実家に戻ったが、3 週間後の 10 月 26 日に帰宅した。この出来事は啄木に大きな衝撃を与え、それまでの創作姿勢を「卑怯なる空想家」と断じ、現実の生活に向き合っ文学のあり方を考察する方向へと向かった。

1910 年に刊行した初の歌集『一握の砂』は 1908 年夏以後の作一千余首中より 551 首を抜いてこの集に収めている。三行分ち書き形式で生活に即した新しい歌風を取り入れ、歌人として名声を得た。この三行分ち書きは、1910 年の土岐哀果（歌人、国語学者）の独創的なローマ字三行書きの短歌集『NAKIWARAI』にヒントを得たとされる。

三行分けによる散文的なスタイルの短歌は、若い世代を中心に多くの追従者を生んだ。その一人が旧制盛岡中学校の後輩で当時在学中だった宮沢賢治で、1911 年頃に短歌創作を始めており、啄木の影響と推察されている。

また、同年に起きた幸徳秋水事件（大逆事件）を契機として、社会主義への関心を深め、文学評論も執筆した。

1912 年結核により満 26 歳で没した。

○代表歌

・『東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる』

現代語訳…東海の小島の磯の白砂に私は泣き濡れて蟹とたわむれる

(この場所は啄木が故郷を追われて移った函館の大森浜と考えられている)

・『石をもて 追はるがごとく ふるさとを 出でしかなしみ 消ゆる時なし』

現代語訳…石をもって追われるごとくかのように ふるさとを出た悲しみは 消える時がない。(啄木の父一禎(いってい)は、寺の住職であったが、本山へ収めるべき費用を滞納して罷免。一年後に取り消しとなったので、復帰を試みたが、一部の村人の反対で復帰は妨害された。精神的に参った父は家を出てしまい、一家は離散。啄木は二度と故郷を訪れようとはしなかったという。)

・『はたらけど はたらけど猶 我が生活(くらし) 楽にならざるけり ちっと手を見る』

現代語訳…働いても働いても暮らしが楽になることはない。じっと手を見る(1910年家族を東京に呼び寄せることはできたが、生活は相変わらず苦しい。当時の職種は朝日新聞社の校正係であった。)

・『たはむれに 母を背負ひて そのあまり軽き(かるき)に泣きて 三步あゆまず』

現代語訳…たわむれに母を背負って、その余りの軽さに泣いて三步も歩むことができない。(母をふざけておぶってみたら、あまりにも軽いことに気がついて、悲しくなったという心の動きが詠われている)

・『頬につたふ なみだのごはず 一握の 砂を示しし 人を忘れず』

解釈例…「なみだ、のごはず」と区切るのが正しい。「のごはず」というのは、のごう＝ぬぐう(拭う)の否定形で、拭わないということである。つまり「頬を流れる涙を拭わない」という意味になる。「頬につたふ なみだのごは」ないのは啄木自身で、自分を感傷的にさせてくれた人々(例えば橘千恵子や長男真一)のことを私は忘れない、というような意味となろう。主語は啄木なのだ。

橘千恵子…函館市の弥生尋常小学校の元教員で、啄木の同僚であった。啄木の数多くの短歌のモデルになっており、啄木が恋愛に似た思慕を持っていたとされる。

*2. 与謝野鉄幹

与謝野鉄幹(1873年～1935年)は、京都生まれの歌人・詩人で、本名は「寛(ひろし)」。与謝野晶子の夫で、後に慶応義塾大学教授、文化学院学監を務めた。

1899年に「東京新詩社」を創立。1900年には『明星』(*4)を創刊して、北原白秋・吉井勇・石川啄木などを見い出し、浪漫主義文学運動の中心的役割を果たした。

当時無名歌人だった鳳晶子（後の与謝野晶子）との不倫が問題視されるようになり、さまざまな誹謗中傷が仕立て上げられたが、晶子の類まれな才能を見抜いた彼は、晶子の歌集「みだれ髪」をプロデュースし、二番目の妻・林滝野と別れることにし、1901年には晶子と再婚し、六男六女の子宝に恵まれた。

1901年に刊行した「みだれ髪」の評判は高く、妻の晶子は『明星』の象徴的存在となり、この歌集は『明星』隆盛のきっかけとなった。後進にも恵まれ好調に見えた『明星』だったが、やがて木下杢太郎・北原白秋・吉井勇らが脱退。

1908年に『明星』は100号をもって廃刊に追い込まれた。その後の鉄幹は極度の不振に陥り、歌集の売れ行きも減る一方だった。

1909年、文芸誌『スバル』（*5）を発行。1911年、鉄幹の心機一転を促すための晶子の計らいで鉄幹はパリに行くことになる。後に晶子も渡仏し、夫妻でパリからロンドン・ウィーン・ベルリンを歴訪した。（鉄幹と離れているのがいたたまれなくなり追いかけた）

しかし、創作活動が盛んになったのは晶子の方で、鉄幹は依然として不振を極め、再起を賭けた訳詞集「リラの花」も失敗に終わるなど、栄光に包まれた妻・晶子の陰で苦悩に喘いだ。

*3. 文芸雑誌『明星』

同人結社東京新詩社の機関誌として、与謝野鉄幹が主宰となり創刊。明星へ寄稿した若手歌人・詩人による革新的な一派。鉄幹・晶子夫妻をはじめとし、北原白秋・石川啄木・木下杢太郎・吉井勇・山川登美子・仲濱絲子・中原綾子、香川不抱らが属した。

*4. 与謝野晶子

歌人、作家、思想家。本名は与謝野志やう（よさのしょう）。旧姓は鳳（ほう）。情熱的な作品が多いと評される歌集『みだれ髪』（1901年）や、日露戦争の時に歌った『君死にたまふことなかれ』が有名である。『源氏物語』の現代語訳でも知られる。

晶子の短歌の評価だが、「上品、優美、清澄、艶、甘美などの情緒が情熱とまざりあって読者をひきこみ、うっとりとした心地よさをあたえるのが『みだれ髪』で、晶子の歌の特徴。また実感を伴ったもののみを歌に詠み、「まことの心を歌ひおきたく

候」（「ひらきぶみ」）と晶子がかいているように、そのときに感じた心の内をすなおに表現している」とされる。

1900年（明治33年）、浜寺公園の旅館で行なわれた歌会で歌人・与謝野鉄幹と不倫の関係になり、鉄幹が創立した新詩社の機関誌『明星』に短歌を発表。翌年家を出て東京に移り、女性の官能をおおらかに謳う処女歌集『みだれ髪』（鳳晶子）を刊行した。女性が自我や性愛を表現するなど考えられなかった時代に女性の官能をおおらかに詠い、浪漫派歌人としてのスタイルを確立した。伝統的歌壇から反発を受けたが、世間の耳目を集めて熱狂的支持を受け、歌壇に多大な影響を及ぼすこととなった。所収の短歌（『やは肌の あつき血汐に ふれも見で さびしからずや 道を説く君』）にちなみ「やは肌の晶子」と呼ばれた。

また「『みだれ髪』は、与謝野鉄幹との激しい恋愛と同時進行過程で生み出された。強烈な官能美と、かつてない大胆な自己の肉体への賛美は、当時の若い人々の胸に秘めた思いを代弁したという。それは同時に、因習的な風土から自我を解放することにつながっていったという。今であってもそうだろうが、毀誉さまざまの世評を呼ぶことになった」との見方もある。

1904年（明治37年）9月、半年前に召集され日露戦争の旅順戦で予備陸軍歩兵少尉として従軍していた弟を嘆いて『君死にたまふことなかれ』を『明星』に発表。大町桂月（高知県出身の詩人、歌人、随筆家、評論家）との間にこの詩をめぐって論議がおこった。

1911年（明治44年）には「平塚らいてう」（思想家、評論家、作家、フェミニスト、女性解放運動家）が設立した青鞥社の史上初の女性文芸誌『青鞥』創刊号に「山の動く日きたる」で始まる詩を寄稿した。

1912年（明治45年）、晶子は鉄幹の後を追ってパリに行くことになった。

洋行費の工面は、森鷗外が手助けをし、また『新訳源氏物語』の序文を書いた鷗外がその校正を代わった。

*5. 文芸雑誌『スバル』

『スバル』は、1909年から1913年までに刊行されたロマン主義的な文芸雑誌である。文芸雑誌『明星』の廃刊後、森鷗外や与謝野寛（鉄幹）、与謝野晶子らが協力して発行した。創刊号の発行人は石川啄木が務めた。石川啄木、木下杢太郎、高村光太郎、北原白秋、平野万里、吉井勇らが活躍し、反自然主義的、ロマン主義的な作品を多く掲載し、同人らはスバル派と呼ばれた。

2. 不抱の短歌界での評価

- ① 昭和四年改造社版の現代日本文学全集第三十八巻によると「その風狂調（風狂は中国の佛教、特に禅宗において重要視される、仏教本来の戒律などの常軌

を逸した行動を、本来は破戒として否定的にとり得るものを、その悟りの境涯を現したものとして肯定的に評価した用語）が 鉄幹の推輓（すいばん、推挙）によって掲載された 石川啄木の歌風に先行する生活派歌人として新体制を拓く」と鉄幹の綴る年譜に見える
若く 魂の叫びのような短歌作品を残して余りにも生き急いだ一生というべきか」とある。

- ② 「『現代日本文学全集第三十八巻現代短歌集現代俳句集』改造社、1929 年」に、不抱について「自家の窮境を歌ひてユーモラスなる新体を開くことは石川啄木に先行せり」と紹介されている。
- ③ 「郷土文化」誌の「香川不抱歌集（第 1 集 昭和 32 年）」から引用すると「作品の数は少なく、世に出て余りにも早く時代を駆け抜けて逝った歌人である。啄木に先立つ生活派歌人として活動し、啄木の歌風に不抱世界を見出すこともできる。与謝野鉄幹や同人の評価は高く、近年においても生誕地に顕彰碑が建立されるなど不抱を偲ぶ人たちがいる」と紹介されている。（「香川不抱現在」による）
- ④ 香川県情報教育支援サービスが『香川不抱碑』（*6）を紹介しているがその説明分には、「生前は石川啄木と並び称され、『明星』派の歌人として活躍。『詩人としての天分及び実力は石川啄木より優る』と鉄幹に激賞された」とある。

*6. 香川不抱碑

碑文

丸亀高校の石庭南西に昭和 43 年 9 月 22 日（1968 年）に建立された。
碑には不抱の残された数百首の短歌の中で絶唱とされる『吾ここに ありと叫びぬ 千
よろずの 中のひとつの 星と知りつつ』の句が刻まれている。この歌は 1908 年（明治
41 年）8 月「明星第 8 号」に発表されたものである。（石川啄木の歌風に先行する生活派
歌人として新体制を拓いている）。なお、碑の揮毫者は上原華園氏



3. 主な出来事

年度	不抱の主な出来事	主な出来事
1889 (明治 22)	香川県綾歌郡川西村鍛冶屋(丸亀市川西町北)で生を受ける	
1899	川西尋常小学校卒 飯山高校入学	・与謝野鉄幹、短歌革新をめざして『新詩社』を結成。
1900		与謝野鉄幹、『新詩社』の機関紙として文藝雑誌『明星』を創刊
1901		・8月、鉄幹、若手歌人であった鳳晶子(のち鉄幹夫人)の歌集「乱れ髪」をプロデュースし、刊行
1902	私立尽誠舎(現尽誠学園)入学、翌年退学	・石川啄木、与謝野鉄幹・晶子夫妻を訪ねる。晶子は鉄幹との間に12人の子供を得る。
1903	香川県立丸亀中学(現丸亀高校)入学	・2月、啄木が高熱を発し、また金銭面でも窮し盛岡に帰る ・7月、啄木『明星』に作品を発表
1904		・日露戦争勃発 ・9月、晶子が『君死にたまふことなかれ』を『明星』に発表 ・10月、啄木上京する。
1905	丸亀中学の三年生のころから作歌に励む。雅号・延齡(のち不抱と改む)。明星派の短歌を愛好し、文学雑誌に作品を投稿。	・5月、啄木が第一詩集『あこがれ』を小田島書房より出版する ・6月、盛岡で新婚生活を送る ・日露戦争終結
1907 (明治 40年)	・故あって一家を挙げ高松西通町に転居。鉄道で高松と丸亀間を通学。 ・不抱、新詩社に入る ・不抱、『明星』に『山の井の水 落ちたる くれなゐの ひと葉の如き 悲しみぞ来る』を発表	・5月、一家が盛岡を追われ、啄木が北海道に移住。自堕落な生活を送っていた。
1908	・8月、不抱『明星第8号』に代表作	

	『吾ここに ありと叫びぬ 千よろずの 中のひとつの 星と知りつつ』を発表 ・不抱、家運の激変と健康を害したことにより高松に帰省、香川新報社(現四国新聞)で記者生活を送る。	・4月、啄木は北海道から帰り、千駄ヶ谷の新詩社にしばらく滞在する¹ ・7月、啄木が「東海の小島…」「たはむれに母を背負ひて…」など、後に広く知れ渡る歌を含む186首を作っていたが、それらから抜粋した114首を翌月の『明星』に発表。 ・10月、鉄幹が『明星』を廃刊する。
1909 (明治42)	・不抱、『スバル』に『君に問ふ 後よりして わが影は 薄くあわれと 見ゆる事なきや』、 『荷車の あまた続きて 美しき 向ひの店の 娘見えなく』、 『弱くして 保ちあたはず 大空に しばし心を あづけて置かむ』を発表。	・1月、鉄幹が文芸雑誌『スバル』を発行 ・4月ごろ、自由な单身生活と家族扶養の葛藤から「家」の抑圧より逃避して自堕落な生活を送っていた。 ・6月、母カツと妻・節子と同居する。 ・10月、啄木が、節子の体調不良に適切な処置をせず、カツと節子の確執もあって「妻・節子が書置きをして実家に出て行ったが、結局は帰ってきた事件」をきっかけに、これまでの創作姿勢を「卑怯なる空想家」と断じ、現実の生活に向き合って文学のあり方を考察する方向へと向かう。
1910		石川啄木、三行分かち書きの生活に即した新しい歌風の歌集「一握の砂」を発刊し歌人として名声を得る。
1911	家運挽回を期して大阪に出たが挽回叶わず、2年後に病を得て高松に帰る	・2月に啄木、体の不調から受診し、慢性腹膜炎の診断を受けて2月4日に入院、手術し、翌月に退院 ・与謝野晶子、史上初の女性文芸誌『青鞥』創刊号に「山の動く日きたる」で始まる詩を寄稿 ・鉄幹、夫の心機一転を促すための晶子の計らいでパリに行く

1912		・4月、啄木が結核により死去。 ・晶子、鉄幹の後を追ってフランスのパリに行く
1913	不抱、病勢悪化するも終日作歌に専念したといわれる	・鉄幹、文芸誌『スバル』を廃刊
1915 頃 (大正 4 頃)		
1917	・不抱、病が悪化し、失意のうちに高松にて死去、享年 29 歳	
1942		・与謝野晶子、死去
1957 ～ 1958 (昭和 32 ～33)	・「郷土文化」誌の誌上で二回に分けて「香川不抱特集」が編まれた。未発表の遺稿は不抱の死後母親によって焼却されたと伝わる。	
1968 (昭和 43)	香川不抱碑が母校・丸亀高校の石庭南西に建立される。代表作「吾ここにありと叫びぬ 千よろずの 中のひとつの 星と知りつつ」が刻まれている。	
1994 (平成 6)	不抱の顕彰碑が生誕地に建立される	
2007	香川明星倶楽部の田山泰三氏が「香川不抱作品集」(*7)を自費出版	

*7. 香川不抱作品集

[香川不抱作品集\(PDF\)](#) をダブルクリック

(四国香川不抱(香川の歌人)(香川県)にある)

4. 不抱の生誕地に建立された顕彰碑

碑文

本名香川栄明治二十二年香川県綾歌郡川西村大字西字鍛冶屋現丸亀市川西町北に生まれる。父政治 母ワキの長男 明治三十二年川西尋常小学校卒業 明治三十五年反残高等主学校 3 年修了 明治三十六年香川県立丸亀中学入学 三年生のころから作歌に励む 雅号延齡 のち不抱と改む 明治四十一

年丸亀中学校卒業 間島琴山らと新詩社香川支部をつくる 東京に出て与謝野鉄幹 晶子夫妻の知遇を得る 近代短歌の主流になる 明星派歌人として明星 スバル 常盤木 火柱等に據って活躍した 昭和四年改造社版の現代日本文学全集第三十八巻には その風狂調が 鉄幹の推輓（すいばん、推挙）によって掲載された 石川啄木の歌風に先行する生活派歌人として新体制を拓く と鉄幹の綴る年譜に見える 若く 魂の叫びのような短歌作品を残して余りにも生き急いだ一生というべきか 大正六年秋 高松市にて病没享年二十九歳

平成六年三月吉日

撰文 竹内 邦雄

書 大西 青照



5.さいごに

筆者は短歌に関して全くの素人であり、短歌の良し悪しがよく分からないのであるが、不抱の代表作『吾ここに ありと叫びぬ 千よろずの 中のひとつの星と知りつつ』にはとても共感を覚える。

資料を読み解く限り、鉄幹が不抱の生活派歌風を評価し、啄木より先行していたことを認めている。啄木が不抱のその手法を真似たわけでもなさそうである。不抱の歌人としての天分や実力に関する鉄幹の評価が明確ではないにしても先人の資料からして、不抱が歌人としての天分や実力がほぼ石川啄木に肩を並べていたと解釈できるのではなかろうか。しかし 2-④項の『『詩人としての不抱の天分及び実力は石川啄木より優る』と鉄幹に激賞された』というのは、根拠となる鉄幹が発した言葉や記述そのものが書かれていないままではいささか言い過ぎではなかろうかと思われる。一種の故郷贔屓だろうか。何しろ啄木は読者の共感を呼び起こす「傷つきやすさ」という歌人としての類まれなき天分を持ち合わせていたのだから。

不抱は実家の家運が激変し資金も絶えたこと、および体調を崩したことにより高松に帰省せざるを得なくなったので、鉄幹のもとにいたのはわずか 1 年余りであった。そして帰省後に病状が悪化し 29 歳の若さで旅立った。それで不抱が歌集を発刊できなかったのではなかろうか。もし当時発刊されていれば短歌界での不抱の評価が変わっていた可能性があったのかもしれない。

理由はともかく、鉄幹や同人に評価されながらも歌集は発刊されなかったが、没後 90 年の 2007 年になってやっと明星派詩人で、香川不抱の研究に取り組んでいる「香川明星倶楽部」の田山泰三氏により『香川不抱作品集』が自費出版された。それ以前に不抱の生誕地に『顕彰碑』が建立され、また母校・丸亀高校の校庭に『香川不抱碑』が建立されている。これらのことは、近年になっても人々が共感を覚える歌であるということを示している。が、近代短歌界においては、不抱は石川啄木や北原白秋らの陰に隠れてしまった。

参考資料

- ・四国香川不抱（香川の歌人）（香川県）
- ・香川不抱丸亀
- ・ウィキペディア

以上